辻元清美の永田町航海記 107

イラストレーション／石坂啓

山本正さんと吉武輝子さん 2人のバトンを引き継がなくては

立て続けに「悲しい知らせ」が届く。山本正さんと吉武輝子さんが亡くなられたのだ。

四月一八日、東京・四谷の聖イグナチオ教会での山本さんの告別式に参列し、「民間外交にとって大事な方を失った」と落胆していた。

と、その翌日。石坂啓さんから吉武さんが亡くなったと聞いた。二〇日、神楽坂の善国寺でのお通夜に駆けつけると、女性解放や市民運動関係の女たちが続々と集まっていた。

お二人の死と向き合う無念の一週間になった。

山本さんは一九七〇年に日本国際交流センターを立ち上げ、日米対話の場である下田会議、日米中協力プロジェクト、アセアン・日本ダイアローグなど民間国際交流の先駆者として活躍された。六七年に始まった下田会議には若き中曽根康弘・宮澤喜一両元首相や土井たか子元衆議院議長らが参加している。戦後の日本外交をリードする会議だった。

昨年、一七年ぶりに下田会議が再開された。現在の日米関係に大きな危惧を抱く山本さんが渾身の力を振り絞って仕切ったのだ。普天間基地問題のキーパーソンで上院外交委員会の東アジア・太平洋小委員会委員長のジム・ウエッブ議員、米国大使首席公使、ビル&メリンダ・ゲイツ財団関係者、藤崎一郎駐米大使、元外務省の田中均氏など日米関係者。国会議員は古川元久議員、長島昭久議員、加藤紘一議員、林芳正議員などが参加。日米関係の再構築について議論をした。山本さんは私に米国の五人の国会議員にプレゼンする機会を作って下さった。

私は日本の政治への女性参加の現状と沖縄における米軍人による事件・事故などについて話をした。米国の国会議員たちは、とくに米軍人による女性への性暴力の多さに驚いていた。私は、なぜ、辺野古の新基地建設に沖縄の人たちが反対するのか、彼らに伝えたかったのだ。

保守色が強い会議だからこそ、多様な意見が大事だ、と山本さんは特別に私に多くの時間を下さった。

NPO法を作る時、保守層をまとめて下さったのも山本さんだった。今度は沖縄に米国の議員を連れて行こうと約束していた。山本さんに辺野古のおじい・おばあの話を聞かせたかったのに……。

「清美ちゃん、もう少しおしゃれをしなさい」といつも私におっしゃっていたのが吉武輝子さんだ。最後までエレガントに闘った女性だった。三〇年前、土井たか子さんの選挙で初めてお目にかかって以来のお付き合いだ。

闘病中も、力を振り絞って脱原発運動の前線に立たれた。

大飯原発再稼働への動きなど現政権への怒りが吉武さんの病気に悪影響していないかしら、と心が重かった。そんな民主党内でも脱原発をめざす議員が決して少数派ではないように思うこと、菅直人前首相や近藤昭一議員、平岡秀夫議員たちと「脱原発ロードマップを考える会」を立ち上げ、脱原発への具体的な道筋づくりに取り組んでいることなどを伝えたいと思っていた。その矢先の死だった。山本さんと吉武さんのバトン、しっかり引き継いでいかなければ。

（つじもと　きよみ・衆議院議員）